

国語科単元学習における新聞活用

－ 遠藤瑛子実践を中心に－

植田 恭子（都留文科大学）

1 国語科における単元学習

国語科の「単元学習」について『国語教育辞典』（日本国語教育学会編・2001年・朝倉書店）では「人間尊重の精神のもとに、学習者の興味、関心、意欲を核にして展開するひとまとまりの言語活動による国語学習指導の方法」と定義されている。

大村はまは、1979（昭和 54）年に教職を去るまで、単元計画をたて、ふさわしい教材を用意し、学習者一人ひとりを「優劣のかなたに」導き、単元学習を展開した。

（大村はま記念国語教育の会のページ omurahama-kokugo.com）

大村はまの「ことばを育て、こどもを育てる」国語教育に学び、国語科単元学習を展開したのが遠藤瑛子である。

2 遠藤瑛子による国語科単元学習の実際

大村はま国語教室の拠点校であった神戸大学発達科学部附属住吉中学校で 20 年以上国語科総合単元学習の授業実践に取り組み、毎年秋には公開授業研究会で授業を公開、退職後は同志社大学でも教鞭を執ったのが遠藤瑛子である。

遠藤瑛子実践に関する事例研究は、『国語科教師の実践的知識へのライフストーリー・アプローチ—遠藤瑛子実践の事例研究—』藤原顕・遠藤瑛子・松崎正治（2006年9月・溪水社）において、実践の事例研究がなされ、遠藤瑛子は二人の研究者のインタビューを受け、「自己の実践の意味づけの編み直し」をしている。巻末の資料「遠藤瑛子授業実践関係年譜」には、教職年数とともに単元学習名が記されており、実に多くの単元を創出したことを確認することができる。変化する社会に対応するために、「情報活用能力（情報収集力、情報選択力、情報産出力）に、課題発見力、学習構想力、発見力を加えて「情報力」と名づけ」、「情報力を育てる」総合単元学習を展開している。

3 遠藤瑛子実践における新聞を活用した単元

前掲書 藤原顕ほか（2006）では、遠藤のライフヒストリーは6期に区分されている。その6区分を基に、本発表では【4】附属中における国語科総合単元学習の確立【5】附属中における国語科総合単元学習の展開とその転機Ⅰ【6】附属中における国語科総合単元学習の展開とその転機Ⅱにおける単元学習の事例について、単元の新聞活用を抽出し、遠藤実践における学習材としての新聞について整理する。

学習材について遠藤は、次の3つに分類している。①関係機関・専門家など人物から得られる情報②作品・書籍などの情報③各種メディアによる情報

なかでも③各種メディアによる情報は、テレビやラジオなどによる音声、映像情報・新聞記事、雑誌の特集など・広告、マンガなどの視覚的情報・パソコン通信、インターネットによって得た情報と多岐にわたる。

本発表においては、遠藤瑛子の著書である『ことばと心を育てる—総合単元学習』（1992年7月・溪水社）『生きる力と情報力を育てる』（浜本純逸編 1997年8月・明治図書出版）『思考力・表現力・協同学習力を育てる—主体的な学びをつくる国語科総合単元学習』（2016年5月溪水社）の3冊をもとに、新聞を活用した単元について、分析、考察する。